

『淫紋 -傲慢な魔法使いと黒珠の贄-』

著：西野 花

ill：笠井あゆみ

目を覚ました時、ルゼは見覚えのない部屋のベッドに横たわっていた。

(……ああ、そうかここは——)

エルフの里ではない。そこから遠く離れた、アドルフアスの屋敷だ。

広いベッドの中にはルゼ一人だった。アドルフアスの姿はない。手脚を伸ばしてみると、腹の中に軽い違和感があった。まだ何かが入っているような感覚。だが、淫紋がもたらす耐えがたい発情の気配は消え去っている。あれだけ苦しんだ疼きがないというだけでひどく楽になっていた。アドルフアスのおかげだ。

「ふう……」

ルゼは上体を起こした。少し重い感じがする。昨夜の痴態を思えば、さもあらんといった感じだ。最後のほうはよく覚えていないが、相当にはしたない姿を見せてしまっただろう。

(呆れられてしまったかもしれない)

そもそも、アドルフアスにはルゼを助ける理由がない。彼は自分とルゼの仲だと言っていたが、自分達は恋人同士でもない。

その時、部屋の扉が静かに開く音がした。

「——起きたかい？」

アドルフアスがこちらを覗き込んでいる。

「身体は？」

「だい、ぶ楽になった……。大丈夫だ」

「そうか。よかった」

彼はにこり、とルゼに微笑みかけてきた。

「昨夜ざっと綺麗にしておいたけど、ちゃんと身体を洗ったほうがいい。風呂に案内するよ。おいで」

そう言って彼が手招きするので、ルゼは慌てて枕元の長衣をひっかけてベッドを降りた。一瞬膝がふらつきそうになるが、なんとか耐える。

「大丈夫？」

「平気だ」

平静を装って答える。アドルフアスは廊下を進み、階段を降りると右に折れた。さらに少し行った先にある扉を開けると、石畳が敷き詰められていた。湯音が聞こえてくる。

「裏の山から温泉を引いているんだ。ゆっくりあたたまるといいよ」

目の前には石で作られた湯舟があり、壁に開けられた穴から豊富な湯が注ぎ込まれていた。その光景を見て、ルゼは瞠目する。

「エルフは風呂好きなんだろう？」

アドルフアスの声にくくくくと頷いた。エルフの里は水が豊富で、水浴びもしょっちゅうするし温泉の源泉もある。体液で濡れた身体を洗えるのはありがたかった。

「ゆっくり入っておいで。上がったら食堂に来るといい。食事にしよう」

「……ありがとう」

ルゼが礼を述べると、アドルフアスはひらひらと手を振って出て行った。裸になったルゼは近くにあった桶で湯を汲み、何度か身体にかける。湯は適温になっていた。身体を洗い終わると足先を湯につけてみた。こちらも熱すぎるといことはないようだ。そっと身体を沈めると、全身が心地よさに包まれる。

「ふう……」

生き返った気分だった。ルゼは湯の中で手脚を大きく伸ばす。ふと自分の下腹に目を落とすと、そこには相変わらず淫紋が刻まれていた。今は治まってはいるが、いずれまた発作が起こるだろう。

（そうしたら、また）

昨夜の行為の記憶が一気に甦ってきて、ルゼは恥ずかしさのあまり湯の中に潜った。

薄闇の中で、自分に覆い被さるアドルフアスの姿を思い出す。均整のとれた美しい肉体。この身体を力強く貫いた逞しい熱の楔。

———どうしよう。

（思い出すと、どうしたらいいかわからなくなる）

肉体に心が引きずられてしまいそうだった。アドルフアスが自分のことをどう思っているかなんてわからないのに。

（アドルフアスはどうしてこんな厄介なことを引き受けたんだろう）

湯につかりながら、ルゼは今更そんなことを思う。昨日はそれを考える前に発作が来てしまい、流されるように抱かれてしまった。

これから彼と顔を合わせて食事をする。その時どんな顔をしていたらいいだろう。それを思うと出て行きにくかったが、いつまでも湯につかっているわけにはいかない。第一のぼせてしまう。

ルゼは観念して立ち上がると湯舟から出て身体を拭いた。気がつくとき新しい着替えらしきものが用意されている。アドルフアスが置いていったのだろうか。薄い水色のそれにおずおずと袖を通すと、さらりとした肌触りで気持ちがよかった。

「食堂って言ってたけど、場所聞いてなかったな」

さっき来た廊下を戻って階段のところに来ると、反対側からいい匂いがしてきた。辿っていくと、ドアの開いている部屋がある。おそらくそこが食堂だろう。

「お、来たね」

アドルフアスが食事の用意をしていた。クリームシチューと、目玉焼きとハムの載ったパン、色鮮やかな果物などがテーブルに乗っている。それらを見ると、ルゼは自分の身体が急速に食物を欲しているのを感じた。

「座ってくれ。食べよう」

「あ、はい」

指し示された椅子に座ると、葡萄水が並々と注がれたゴブレットが置かれる。いたれりつくせりだ。

「召し上がれ」

「……すまない。いただきます」

気取りのない料理だったが、どれも美味しかった。そう言えば、淫紋の発作でずっと食欲がなかったことを思い出す。ルゼはその分を取り戻すようにシチューもおかわりしてしまった。

「口に合うかな？」

「すごくおいしい」

「それならよかった。エルフの王子様にはもしかしたら気にいってもらえないかと思ったけど」

彼の言葉に、ルゼは口をつけていたゴブレットをテーブルに置いた。

「どうかな。俺は王子として認められていなかったかもしれない」

闇の魔法使いの祝福を受けてしまった者が王族として名を連ねているのは、両親や兄姉にとっては不名誉なことだったのかもしれない。姉のプリシラだけは優しくしてくれたが、彼女も他の家族とルゼを天秤にかければ、絶対にルゼ以外の家族のほうを選ぶだろう。

「でも、姉があなたに頼んでくれたことには感謝している。あのままだったら、俺はどうなっていたかわからない」

「おそらく早々に淫紋に食い尽くされ、衰弱死するか気が触れてやはり死ぬかしていただろうね。その呪いはそれほどに強い。プリシラが僕を選んだのは大正解だったよ」

「……」

ルゼは両手でゴブレットをぎゅっと握りしめる。自分のそんな行く末を想像すると、背筋が寒くなった。

「どうしてだ？」

「うん？」

「どうしてそんな、面倒くさいことを……。もしかしたら、サイラスに目をつけられて厄介なことになるかもしれないのに」

「まあそうだね。自分のかけた呪いに僕が干渉していることは、おそらく向こうにも知られているだろうな」

「それは」

「けどプリシラが君の窮状を知らせてくれたことを、僕は感謝している」

アドルフアスはテーブルの上の赤い果実を手にとると、そのまま無造作にがぶりと齧りついた。思いのほか粗野な仕草なのに色気がある。昨夜のことを思い出してどきりとした。

「下心があるのは否定しないよ」

「あんなことがしたかったのか」

「知っていたらどう？」

ルゼは唇を噛む。

「あんな亜生物に好きにさせたのは悪かったと思っている。けれど泣き喘ぐルゼの姿を見ていたら、どうにも興奮が治まらなくて」

「それ以上言うな！」

思わず声を荒げたルゼの前で、男はにやりと笑った。

「僕もまた魔法使いだ。道を究めるためには非人道的なこともする。ひどい男なのには変わらないよ。サイラスとは対照的な扱いをされているみたいだが、実のところさほどの違いはないかもしれない」

それはそうかもしれない。

アドルフアスは人間だが、魔道を進むには人間という種であることを捨てなければならない。人の理から外れ、寿命を越えるには、人間のままではいられないからだ。それをあっさりとして捨て去ることができるものでなければ、魔法の道は極められない。

「……あの時のことは、俺にも非がある。一方的にあなたを責めようとは思わない。けど」

あの時、自分がどんなに恥ずかしくて情けなかったか。

果たして彼に、そんなことを理解してもらえるのだろうか。

そんな内面の葛藤が伝わったのかわからないが、アドルフアスはうっすらと柔和な笑みを浮かべた。

「いや、あれは僕の責任だよ」

「……」

「君に責があるとすれば、あれで決定的にしてしまったことかな」

「……何を」

「君に対して欲望を抱いてしまったことだよ、ルゼ」

「っ」

面と向かって告げられて、思わず息が詰まる。

「だから今回の件は渡りに船だった。君は僕に対して申し訳なく思うことなどないよ。このアドルフアスの名にかけて淫紋の解呪を引き受けよう。——君が耐えられればだが」

「耐える、とは」

「もちろん、僕に与えられる快樂に」

しゃり、っとアドルフアスが赤い実に齧りつく。ルゼの鼓動が跳ね上がり、身体が昨夜のことを思い出したように熱くなった。これも淫紋の作用なのだろうか。

ルゼは死にたいとは思わない。気が触れるなどもってのほかだ。だとしたら、目の前の男に賭けるしかない。

「わかってる。大丈夫だ」

膝の上で拳をぎゅっと握りしめた。

「どうか、よろしく頼む」

ルゼは目を伏せて男に言った。

「淫紋を見せて」

アドルフアスに言われて、ルゼは衣服の前を開け、彼に身体を見せた。羞恥心に耐えるためにそっと横を向く。

陽が高いうちから彼の部屋に呼ばれた。壁一面の棚に詰められた本が、それでも置ききれずに床に積まれている。棚の上にも用途のよくわからない置物や道具が所狭しと並べられていた。窓を覆う布が陽の光を遮っている。それでも鳥の声や昼の空気が、容赦なく部屋の中に忍び込んできていた。

アドルフアスの視線がじっと下腹部に注がれるのがわかる。見られている部分がちりちりと熱を帯びているみたいだった。

「まだほとんど変わらないか。まあ、昨夜初めて魔力を注いだからな」

引き締まった褐色の下腹に白く刻まれた呪いの淫紋。その上に、男の長い指先がそっと這わされた。

「っ、ン」

「敏感なんだな」

「これ、も、淫紋のせい……？」

「どうかな。君の場合はもとからのような気もするけど。それが淫紋で底上げされてしまっているから、更に大変なことになっている」

「そんな……」

思っていたよりも深刻な事態だったことにルゼは眉を寄せる。だがそんなルゼの肩を、アドルフアスが優しく引き寄せた。

「大丈夫だよ。僕に全部委ねてくれ」

「……っ」

衣服をずらした肩口にちゅっ、ちゅっと口づけられ、はあっ、と甘いため息が漏れる。肉体がこの後のことを期待し始めていた。浅ましい。けれどこれは俺のせいではない。ルゼは自分にそう言い聞かせた。

「キスしてくれ」

「……」

ルゼはためらいながらもアドルフアスの口に唇を押し当てた。ゆっくりと深く合わせられ、そこから舌先が差し入れられる。慣れないながらもそれを受け入れると、感じやすい口腔の中をじっくりと舐め回された。

「……っ、ん、あふ……う……っ」

びちゅ、くちゅ、という音が響くたびに。身体がびくびくと震えてしまう。頭の中がぼうつと
なって、思考が鈍くなっていった。ルゼはいつしか夢中になって、自分から顔を傾けて彼と舌を
絡め合う。

「……可愛いね」

「ん、ん…う……っ」

ベッドの上で向かい合って座り、腰を抱いていたアドルフアスの手が胸元にするりと忍び込ん
できた。肌を撫で上げられると、勝手に反応して震えてしまう。

「昨日も思ったけど、ルゼの肌は本当に手触りがいい。掌にしっかりと吸いつくようで、それで
いてすべすべしている」

褒められるのは何だか恥ずかしかった。何も言えずにいると、彼の親指の腹に胸の突起を捕ら
えられて転がされる。その途端、びくん、と背中が大きく跳ねた。

「ん、はっ！」

くりくりと転がされて鋭い刺激が生まれる。むずがゆいような、くすぐったいような感覚はま
ぎれもない快感だ。甘い痺れを伴うそれが我慢できない。

「や、はっ…、あ、あ、んんっ！」

「ここ、好き？」

人差し指の先でぴんぴんと弾かれるようにされて喉を反らせる。銀色の髪が揺れて垂れ下がっ
た。弄ばれる小さな突起は硬く尖って、ルゼが感じていることを示してしまう。

「あ、は、ああ…あ、や、そこ、ああ…っ」

翳られるごとにだんだんとたまらなくなってくる。淫紋の刻まれた下腹部が連動するようにず
くずくと疼いた。

「あっ！」

ふいに視界がぐるりと回って、ルゼはシーツの上に押し倒されていた。弄られてぷっくりと膨
れた乳首を舌先でぬるん、と舐め上げられる。

「あふ、ああっ」

ぢゅっ、と吸い上げられると、腰が抜けそうになった。

「こんないやらしい乳首を見ると、虐めたくなるよ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>